

# 目に見えないものの復興のために…

あの日 2011 年 3 月 11 日から 9 年が過ぎた。あの日奪われ、失われたものがなんと多かったことか。地震で倒壊した家屋、津波で跡形もなくなった街、放射能で失った故郷、希望・夢、仕事、そして命。9 年の歳月で、目に見えるものの機能の回復は確かに進められている。それを復興と呼べば、復興は進んでいる。しかし、あの日から時間が止まってしまった人々がいることを忘れてはならない。9 年前に受けた精神的な打撃やトラウマはこの歳月に癒されるものではない。

あの日から 1 ヶ月後に立ち上げた東日本大震災被災地応援実行委員会は、「あの日を忘れない」を活動の柱に、被災地に「あなたに寄り添いたい思い」を届ける活動を続けてきました。そして、多くの被災者との「出会い」に恵まれました。被災者が、困難にもめげずに生きる姿に感動させられました。

## 被災地の今を見つめる

岩手・宮城・福島

<数値は 2020 年 3 月 1 日時点：警視庁被災自治体調査より>

- 鉄道の復旧は 3 月 14 日の JR 常磐線の全線開通により復旧完了。

しかし…

- 町に人が戻らない・戻れない 人口減少が進む。

被災前と比較して宮城県女川町では、**41.5%の減少**。宮城県南三陸町では**35.8%減少**。

福島第 1 原発事故の影響を受けた 7 町村では、**90.0%の減少**。

- 整備した土地の 4 分の 1（東京ドーム 50 個分）が「利用されないままの「空き地」

## 東日本被災地全体

死者

1 万 5899 人

行方不明者

2529 人

震災関連死

3739 人

避難生活者

4 万 7737 人

## 繋がりを宝に

2011年3月11日に起こった東日本大震災(東北地方太平洋沖地震およびこれに伴う福島第一原子力発電所事故による災害の総称)を機に、当時の生徒たちの被災地の助けにならないかという情熱で発足したこの組織も9年目を迎える。昨年9月、台風15号が関東を直撃し、千葉などで大きな被害が出てすぐの委員会のランチミーティングのなかでも、何度目になったか

知れない「災害は、いつどこでも起こり得る」という思いを新たに。「予測不能な災害による被災地は、一地域に限られたものではない」「もっと視野を広げてみて、自分のできる活動を…」と様々な意見が交わされた。これまで、2017年熊本地域の被災地、2018年7月に川の氾濫で被災した岡山県倉敷市真備町や、宮城県丸森町と繋がりを得た。「11円募金」により支えられた収益をもとに、自分たちの想像力を駆使して必要とされる物資やメッセージカードや寄せ書きなど、自分たちの「思い」を届けるために活動を続けている。一度繋がった「絆」を大切に、一本の糸を大切に紡ぐかのように地道な活動が肝心と歩みを進めている。この2月、これまで最高学年として活動を支えてくれた、高校3年生勝浦あゆみさんを囲む会がもたれた。昨年の春に卒業した上尾さんも来校され、活動を続ける後輩たちに「思い」を託してくれました。



### 上尾さんからの Message(中学1年生から6年間、実行委員会活動に参加。京都府立大学在学中)

平安女学院中高を卒業して、東日本大震災被災地応援実行委員会の生徒たちが活動を引き継いで取り組んでくれたことがとても嬉しかった。高校3年生のとき、私は防災について意識を高めてもらいたいとアイデアを募ったが、なかなか体験ナシに満足いくものが出来たとはいえない。続けることが大事だという考えの下、大学では「都市の災害史」というリレー講義の授業を選択した。歴史の文献から災害を紐解く内容だったが、「日本人がどんな社会不安を抱えていたのか」「いまそれを知ることで寿命を越えた防災も可能になる」ことが理解できた。私たちの活動を振り返ってみると、なぜこの活動を続けるのかという疑問が行動を躊躇させたこともあったかもしれない。しかし広い視野に触れて中高生のときを振り返ると、自分に何ができるか真剣に考えた有意義な時間でもあった。みんなには続けることの大切さも知ってもらいたい。そしてそこで得られることはとても大きいと感じている。

## クリスマスプレゼントのお礼状が届きました

岡山県倉敷市真備町では、少しずつ復興が進み、リフォームも完成させた家々もあれば、いまだ仮設住まいの人たちも残されている。被災者にとって時の流れは一樣ではなく、個々それぞれに「格差」が生じていると、厳しい現状が知らされました。一方で、この12月にお送りしたふりかけを手作りお寿司に添えて「お楽しみ会」が開かれ、会員の皆さんでひと時の楽しい時間をもたれたご様子をお知らせ下さいました。このお手紙は、来月掲示したいと思っています。

